

長袖を着る人も増え始めました。

現在会員登録数 4,566 人さま。次号は 11 月 20 日発行の予定です／

＋-----◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

《6》富安陽子 腕だめし STORY COMPE. 2025

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

＋-----＋

■-----■
【1】お知らせ

●国際シンポジウム

「絵本の魅力を語り合う 日本とウェールズの絵本作家の交流を通して」
日本を代表する絵本作家である長谷川義史さんと、英国ウェールズの絵本作家が絵本の魅力を語ります。

◇日時：11月3日（月・祝） 13：00～16：00

◇場所：大阪府立中央図書館 2階 多目的室

◇対象：子どもの本に関心のある方ならどなたでも（中学生以上）

◇定員：60人 ◇参加費：1000円（JBBY 共催）

※ 詳細・お申し込みは↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/02_lecture/index.html#20251103

●ワークショップ「ウェールズの絵本作家と絵本をつくろう」

◇日時：11月2日（日） 13：00～16：00

◇場所：大阪府立中央図書館 2階 多目的室

◇対象：小学生 ◇定員：20人 ◇参加費：500円

※ 詳細・お申し込みは↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/01_kids/index.html#20251102

●英語圏児童文学会 第55回研究大会 （IICLO 共催）

◇開催日：11月15日（土）、16日（日）

◇会場：大阪府立中央図書館 2階 多目的室・大会議室

◇参加費：一般 1000円（2日間有効）

<日本児童文学学会・絵本学会・英語圏児童文学会連携企画>

素手で荒野に行く－三宅興子の軌跡－

「語り継ぐ」シンポジウム「三宅興子先生のお仕事を振り返る」

鈴木穂波/佐藤宗子/土居安子/正置友子/島式子/藤井佳子

※ 詳細・お申し込みは → <https://congres55-2025.peatix.com>

●「大阪国際児童文学振興財団 研究紀要」第39号の原稿募集

応募締切：10月31日（金）

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/06_res-pub/04_journal/boshu.html

● «ご寄付をお願いします» 当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。
→ <https://syncable.biz/associate/19800701>

【2】コラム

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Yukiko's Talk

『パッチーズ ぼくらがつなぐ小さな世界』 佐藤まどか/作 嶽まいこ/絵
岩崎書店 2025年9月 対象年齢：中学生以上

*今回のゲストは武庫川女子大学の福本由紀子さん（F）です。

あらすじ：父親の失業のために引っ越し、中学2年生から制服のない中学校に転校してきた柊（しゅう）は、ゴシップ好きな生徒たちに母親の仕事と服装をからかわれて、言い返し、突き飛ばされて大切なフード付きの服のひじに穴をあけてしまう。新しい服を買う余裕がないので、百円ショップで買ったフェルトでひじ当てを作ってアイロンで貼り付けて学校へ着ていく。すると、また、ゴシップ好きたちからからかわれるが、裁縫好きのマコちゃんにほめられ、それから、ノマリン、いかつく見える源太郎たちと仲良くなり、着られなくなった服をアレンジして楽しむようになる。それを見たゴシップ好きたちは、ますます柊に絡んでくる。また、読んでいるうちに、父が失業した理由もわかるようになっていく。

F：読みやすく、いじめ、貧困、家族問題、アップサイクルなどの現代の子どもをとりまく問題をうまく取り入れた作品だと思いました。

Y：著者の最近の作品には、いつも子どもたちが抱えている問題とどう対峙していくかという視点があるように思います。例えば、『アップサイクル！ぼくらの明日のために』（ポプラ社 2023年10月）が挙げられます。

F：特に興味深かったのは、布をつないでいくということにいろいろな意味を持たせているところでした。布をつなぐ作業が、物語を紡ぎ、人と人をつなぐことにつながり、布の色が一枚ずつ違うことは子どもたち一人一人の個性が違うことを思わせ、小さな布が一枚の大きな布になっていくことは、一人一人の力は小さくてもみんなが一つになれば大きな力になるということが書かれていると思いました。

Y：着られなくなった服も使いようによって魅力的になる。人も他の人とのつながりようによって変われるということもあるかもしれません。

また、布をつなぐという点で言えば、制服の必要の議論があるときに、よく、いろいろな服を買うのは貧困の子どもにとってつらいので、制服の方がいいと言われることがあります。この作品は、お金をかけなくても、自分らしい服装でいることは可能だということをうまく伝えていると思いました。

F：制服自体が高すぎて買えない子どももいるので、制服＝節約とも限りませんよね。

この作品でもう一つ強く印象に残ったのは、「色」でした。「雨雲色の服」を着ている柊が、服に工夫をすることによって少しずつカラフルになっていきます。それは彼の気持ちの変化も象徴していると思いました。

Y：私がうまいなと思ったのは、柊がゴシップたちに足をかけられ、ひどい言葉を投げかけられて反撃として頭突きをしたにもかかわらず、母親までもが学校に呼び出され、一方的に謝罪を求められたという理不尽な出来事と、父親が失業に至った理不尽な出来事が重ねられていたところでした。理不尽な世の中にどう立ち向かっていくべきか、読者に考えさせるようになっていたと思いました。そして、ゴシップたちの柊に対する執拗ないじめの言葉がとてもしリアルだと思いました。あとは、怒りを感じたときに、百科事典に掲載されていたフンコロガシを思い出して落ち着くとか、柊がマコちゃんたちと少しずつ仲良くなっていく様子とか、ユーモラスな部分もおもしろかったです。

F：この作品には、10年後の柊たちの様子がでてきます。なるほどと思った反面、読者が自由に想像できてもよかったかもしれないとも思いました。また、マコちゃんについては、もう少しどんな子か知りたかったなとも思いました。

Y：私もそこは気になりつつ、進路や職業の多様性や、未来の社会への希望が伝えたかったのだと思って読みました。最後まで読むと、生成AIが当たり前の時代に、記憶力より想像力を大切にし、人とのつながりがあれば、生きていけるというメッセージが伝わりました。これはこの作品の大きな魅力だと思いました。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第122回「沼森」

短歌を呑み込む

これも、「初期短篇綴」の1編、「秋田街道」（当メルマガ N0.180 参照）のつぎの作品です。

原子朗著『定本宮澤賢治語彙事典』（2013年）の「沼森」の項目を確認すると、「岩手山の南東、岩手郡滝沢村にある。標高五八二m。」とあります。

賢治の短歌にも、「沼森」と詞書のある2首があります。——「この丘の／いかりはわれも知りたれど／さあらぬさまに 草穂つみ行く。」「丘丘が／つどひてなせるこの原に／なんぞさびしき／沼森の黒」1916（大正5）年7月、盛岡高等農林学校2年生の賢治が、関豊太郎教授の指導の下ではじめて地質調査に行ったときに詠んだものです。

この散文の「沼森」の書き出し「石ヶ森の方は硬くて瘠せて灰色の骨を露わし大森は黒く松をこめぜいたくそうに肥っているが実はどちらも石英安山岩（デサイト）だ。」からは、「石ヶ森」という詞書の別の1首が思い出されます。——「こゝに立ちて誰か惑はん／これはこれ岩頸なせる石英安山岩（デーサイト）なり」「岩頸」とは、溶岩が塔のように露出しているところでした。

どうやら、散文「沼森」は、地質調査のときに詠んだ短歌を書き直していったもののようです。「沼森」という詞書の2首も、ほとんどそのまま取り込まれています。

〈はてな、あいつが沼森か、沼森だ。坊主頭め、山山は集いて青き原をなすさてその上の丘のさびしさ。ふん。沼森め。〉

〈柏はざらざら雲の波、早くも黄びかりうすあかり、その丘のいかりはわれも知りたれどさあらぬさまに草むしり行く、もう夕方だ、はて、この沼

はまさか地図にもある筈だ。〉

短歌を呑み込みながら進行する「沼森」は、短歌の調べやリズムを残す饒舌な口語体です。夕暮れの山々がまるで人物のように描き出されます。

「沼森」の一節「もう夕暮も間近いぞ。柏の踊りも今時だめだ、まばらの小松も緑青を噴く。」と、童話「かしわばやしの夜」の冒頭「清作は、さあ日暮れだぞ、日暮れだぞと云いながら……」を重ねるのは榊昌子です（『宮沢賢治「初期短篇綴」の世界』2000年）。榊は、童話集『注文の多い料理店』（1924年）に収録された作品のうち、「かしわばやしの夜」がもっとも早い日付をもつことも指摘しています。短歌を呑み込んだ「沼森」は、まだ十分に「童話」になっていないような気がします、が、「童話」へと向かうテキストだったのかもしれない。（馬車別当）

（本文の引用は、新潮文庫『宮沢賢治万華鏡』によりました。）

《3》子どもの本の珠玉のことば 76

ちゃぶん、こぼっ、
「あっ、クロだ、クロだ。へっ、いちにんまえに。なまいきだよ、なあ、ゆう子。」

「うん、なあ、にいちゃん。」

ゆう子も達夫のまねをして、いいました。

「クロ、クロ、おまえも、きりがこいのがすきなのかよう。うれしいのかよう。」

「クロ、クロ、うれしいのかよう。」

その時、きりがすうっと流れ、池のむこうがわに、人が立っているのが、ぼんやり見えました。達夫はぎょっとして、思わずゆう子の手をにぎりしめました。

きりをすかして、よく見ると、それは伝二郎おじさんでした。

（「鯉のいる村」『鯉のいる村』 岩崎京子/作 岩崎ちひろ・東本つね/絵 新日本出版社 1969年12月 p.139-140）

1922年生まれ、岩崎京子さんが7月10日に亡くなりました。102歳でした。1964年『シラサギ物語』（講談社）でデビューした岩崎さんの代表作の一つともいえる「鯉のいる村」からの引用です。

主人公の達夫の村は、「上越線、小千谷駅からさらにバスで山道をいいかげんのぼったところ」にある200軒の村で、「まわりにため池をほり、コイをかって」います。達夫は一人っ子で、父親からよりわけの時出るくずのコイの一匹をもらって、クロと名付けて飼い、冬越しをしたので喜んでいます。そんな時、いところで5歳のゆう子が東京からやってきて、達夫の家に預けられます。達夫はゆう子を妹のように思い、ゆう子も達夫を慕っています。

引用の場面は二人でクロを見ているところへ、父の弟で、やはり鯉を飼っており、「かわり者で、時々だしぬくようなまねをする」伝二郎おじさんが近づいてきたところ。「きりがすうっと流れ」という一言が、山の風景の中で不気味に見える伝二郎おじさんの様子を読者に印象づけます。伝二郎おじさんは、達夫にクロが欲しいといいますが、達夫は断ります。

このあと、達夫は、クロだけの池を作ります。そしてゆう子は、きれいな大きなコイが欲しいといって達夫を困らせますが、母親が来て東京へ帰ってしまいます。達夫はクロを共進会に出しますが、友だちのコイが1万円で売れたのに、クロは入賞もしませんでした。ところが、大雪が降った冬を越すと、なぜ、伝二郎おじさんがクロを欲しいと言ったかがわかるのです。

達夫がクロを飼うことによって起きる、ゆう子や伝二郎おじさんや友だちとの関係がドラマチックに描かれ、豊かな自然の達夫の心情とともに変化します。改めて野間児童文芸賞にふさわしい作品だと思いました。(Y)

《4》 行って来ました！

兵庫県立歴史博物館で11月24日まで開催されている企画展「童謡と大正ロマン」に行ってきました。雑誌、図書、双六、パンフレット、レコード、楽譜など300点以上が展示されており、作者や作品に関する丁寧な解説が付けられたわかりやすく充実した内容の企画展でした。

全体の構成は、序章「1918年の子どもの世界」、第1章「『赤い鳥』と童謡運動」、第2章「ひろがる童謡」、第3章「楽譜にみる大正ロマン」、終章「童謡のゆくえ」、唱歌などを展示した特別展示1「童謡以前の子どものうた」、特別展示2「受け継がれる童謡「日本の歌百選」より」となっています。

序章「1918年の子どもの世界」では、大正7年(1918年)に雑誌「赤い鳥」が創刊された頃の児童文化が、「少年世界」、「少女の友」、「子供之友」などの雑誌や立川文庫や双六などの資料で紹介されています。大阪府立中央図書館国際児童文学館の所蔵資料も数多く展示されており、こんな資料もあったのかと思いながら見ていきました。

何より圧巻は、兵庫県、播磨・高砂出身の作曲家で、「月の沙漠」を作曲した佐々木すぐるが自費出版した『青い鳥楽譜』の展示。別刷りのカラーカタログが無料配布されていますが、全100点のうち、98編の表紙が壁一面に展示されています。そのうち、96点が兵庫県立歴史博物館「入江コレクション」所蔵です。入江コレクションとは、「大阪の児童文化史研究家、入江正彦氏(1932~2000)が収集した日本の児童文化に関する一大コレクション。江戸時代から現代にいたる子供の玩具、書籍、教育資料などを通覧することができる、日本でも一・二を争う貴重な資料」(博物館ホームページより)で、改めて「入江コレクション」のすばらしさを感じました。

「青い鳥楽譜」には、「北原白秋、野口雨情、藤井清水、草川信、岡本帰一、武井武雄などのよく知られた詩人、音楽家、童画家が制作に携わっており、豊かな芸術性を有するもの」(カタログより)で、「童謡と大正ロマン」を堪能させてくれる内容でした。

「童謡」を切り口に、子ども向けの出版物を見ると、いかに洗練された「童画」が描かれていたのか、いかに「文学・音楽・美術」が一つになって、大正期の児童文化を作り上げてきたのかがわかります。「歌い継がれた童謡」を口ずさみながら帰りました。(K)

兵庫県立歴史博物館

<https://rekihaku.pref.hyogo.lg.jp/>

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第24回

第5章 古田足日先生

その3 社会にひらく「散文」(中の後半)

昨年(2024年)は、古田足日・田畑精一の絵本『おいしいのぼうけん』(童心社1974年)の刊行50周年でした。私が古田足日先生(1927~2014年)に出会ったのは、『おいしいのぼうけん』が刊行された、つぎの年。私は19歳でした。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとなえ直しも試みます。ご愛読ください。

<本編はこちらから>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

《6》 富安陽子 腕だめし STORY COMPE. 2025

第1回「富安陽子 腕だめし STORY COMPE. 2025」結果発表!

◎第1位 「かばんの中のアイスクリーム工場」中村れいこ/作

※ 富安陽子理事長の手描き表彰状を贈呈します。

◎第2位 「みちばたー」さかなこ/作

〔講評〕

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/storycompe-lkekka.html

中村れいこさん、さかなこさん、おめでとうございます!

「第1回コンペを終えて」 理事長 富安陽子

初めての“STORY COMPE”。この新しい試みに参加して下さる方が果して何人いらっしゃるだろうか?と不安でしたが、46人もの方が、それぞれに楽しい物語を書いて送ってくださって感激でした。作品に投票して下さった81人の皆さん。たくさんのエールと感想をありがとうございました。みなさんの言葉はきっと新しい書き手の力になると思います。

今回のキーワードはアイスクリームとカバン。私が同じ条件で書いた物語を読んで「え?こんな使い方でもいいの?」と思った人もいるかと思います。ええ、もちろん、こんな使い方でも全く問題ありません。コンペの条件は物語の中に必ず、この2つのキーワードを入れる、ということでした。アイスクリームとカバンにまつわる物語を書く、ということではありません。むしろ、この2つのキーワードをストーリーの中でどのように使うか、というところも物語づくりの肝になってきます。

今回、このキーワードを使った物語を書こうと思った時、私の頭の中に浮かんだのは、ヒマラヤ山脈の奥地にある幻の山、アイスクリーム山を目指す探検家の話と、飼い主の趣味で“アイスクリーム”と名付けられた、自分の名前が大嫌いな犬の話でした。もう一つのキーワードはカバン。これは、なんとでもなります。物語の中に、黒いカバンを持った人を何気なく登場させてもいいし、カバン屋さんの看板を風景の中に入れ込むこともできるでしょう。つまり、どうとでも料理できるということです。

最初に浮かんだ2つのアイデアの筋を追っかけようと思ったのですが、どちらも10枚には収まりきりそうもなく結局断念しました。

そして、次にぽっかり頭に浮かんだ蔵守猫のお話を書き上げたというわけです。

キーワードに縛られるのではなく、その2つの言葉からどれだけ自由に発想を広げられるか——。コンペの作品の条件にわざわざキーワードを設けたのは、発想を広げるトレーニングのためです。次回はずいぶん、その点を意識してチャレンジしてみてください。

ユニークな発想を鍛えることは、とても大切です。他人には真似のできない自分ならではのイメージをどこまでふくらませられるのかが、創作には常に問われます。

最近のAIはかしこくなっていて、“アイスクリーム”“かぼん”というキーワードを入力し、10枚以内の子ども向けの物語を考えてくれ、たとえば、それなりの答えを返してくれます。……ということはつまり、今後の創作コンクールでは、AI作品ではないかというチェックが入るということです。AIに頼っていなくても、AIが考えつくような物語を書いていたのでは、ハネられてしまう可能性があります。

AIが到底考え付くことのできない物語、それを磨くために、発想力が求められるのです。

さて、今回のキーワードは、今回上位入賞した二人の作者に決めてもらいましょう。一人ひとつずつ、お二人から出される言葉が、次のコンペの2つのキーワードになります。お楽しみに！

第2回の“STORY COMPE”の募集は、今回のメルマガジン発行日である11月20日です。この時に、新しい2つのキーワードも発表します。たくさんのご応募をお待ちしております。そう、みんなで面白い物語を書きましょう！

<富安理事長の参考作品はこちらから>

「蔵守猫の話」

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/storycompe-lkekka.html#ref-1

<詳細はこちらをご覧ください>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/storycompe-lkekka.html

■ ----- ■

【3】全国のイベント紹介

■ ----- ■

● JBBY出版編集セミナー「絵本作家50年 絵本を語りつくす」

講師：五味太郎（絵本作家）

聞き手：谷口高浩（福音館書店編集者）

日時：11月8日（土） 定員：150人 参加費：有料

場所：学研東京本社ビル3階ホール（東京都品川区）

※後日、アーカイブ配信あり

主催：日本国際児童図書評議会（JBBY）

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■ ----- ■

【4】プレゼント

■ ----- ■

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『パッチーズ ぼくらがつなぐ小さな世界』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1) お名前 (2) 郵便番号・住所 (3) 電話番号 (4) メールアドレス、よろしければ (5) このメルマガのご感想をお書きのうえ ご応

募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/uL2TpNhMEYWJpnQ9A>

締切は11月10日(月)、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |
—」 —」 —」 —」 —」 —」 —」 —」 —」

木々が色づき始め、キンモクセイの香りが漂い始めました。地域名が染め抜かれた秋祭りののぼりが目に留まります。当財団も恒例の「おはなしモノレール」を10月26日(日)に開催予定です。子どもたちといっしょにモノレールの車窓から秋を楽しみたいと思います。(T A)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp
